５．まとめと今後の課題

第１節　現職教員の生活と研修ニーズ

金子真理子

１．教師の負担感

教育改革のなかで、教師の負担増が指摘されている。今回調査で、「退勤時間」について尋ねたところ、小学校教師では 18 時台がもっとも多く 37.6 %、19 時台が 31.8 %であった。これに対し、中学校教師では 19 時台が最も多く 47.4 %、18 時台が 33.5 %であった（図 2-2-9)。さらに「片道通勤時間」は、小・中学校教師ともに、25 分程度が平均的時間である（図 2-2-8)。

次に、教師たちは平日の帰宅後にどのように生活しているのだろうか（表 2-2-6)。平均して、「授業準備・教材研究時間」は小学校教師 35.3 分、中学校教師 45.5 分であり、「学校関係・事務処理従事時間」は、小学校教師 40.9 分、中学校教師 27.7 分である。授業準備や学校関係の事務処理に使う時間をあわせれば、小・中学校の教師とも、1 時間以上は仕事をしていることが予測される。さらに、「食事準備や育児の従事時間」をみると、平均して、小学校教師 96.5 分、中学校教師 73.8 分は費やしている。このようななか、「家での娯楽に使う時間」は小・中学校の教師とも、平均 50 分前後に過ぎない。

2002 年現在、教育改革のなかで教師の負担が以前より増しているという、別の調査結果もある。「第三回学習指導基本調査速報版」（ベネッセ教育総研 2003,21 頁）では、「退勤時刻」と「家での仕事（持ち帰り仕事)」について、98 年時点と 02 年時点に実施した同一の調査結果を比較している。その結果によると、小学校･中学校ともに、「退勤時刻」は遅くなっており、「家での学校の仕事に費やす時間」も増加していることがわかった。このような負担増の原因について、自由記述の回答では「絶対評価導入による」「『総合的な学習の時間』の準備による」「週 5 日制による平日の業務過多による」「それらの複合による」などが挙げられていた。

２．研修のための条件整備の必要性

以上の近年の状況からみると、夜間大学院で現職研修を受けようとする小・中学校の現職教員は、非常に困難な生活時間をやりくりして、時間を「捻出」しなければならない。今回の我々の調査では、このように多忙な生活時間の教師たちに、「現職のままで大学院で研修を受けるときに重視すること」を３つまでの多重回答で尋ねている（図 2-2-13)。「授業の内容」をあげた者が最も多く、76.1 %に及ぶ。続いて、「距離・通いやすさ」 49.7 %、「開講時間」 39.9 %、「研修中の生活」 35.6 %、「研修中の勤務条件」 31.9 %である。以上より、第一に、生活時間をやりくりして大学院で学ぶ以上、その犠牲を埋め合わせる「授業の内容」が何よりも重要である。第二に、教師たちの生活をサポートできるような、アクセスのよさや開講時間が大学側に求められている。第三に、研修中の生活や勤務条件など、学校管理職や教育行政からのバックアップが求められている。

３．現職教員が大学に求める授業内容

多くの現職教員にとって、大学という場は、過去に通り過ぎた場であり非日常的な場で

はないだろうか。2003 年 3 月に実施した座談会では、ある女性教師は、当座談会への出席のために、大学の門を再びくぐった感想を次のように語ってくれた。

「けさ久しぶりに門をくぐって大学に入りましたときに、ウン十年前に私も大学を卒業して社会に働きに出たときと、逆の気持ちというのを感じました。学校の中にいた大学生のときには自由で、好きなふうに。その中に戻ってきたような、タイムスリップしたようなものを感じました。（中略）学生のときに自分を指導してくれた教官というのは、とても自由で、確かな知識を持っていて、しかも人間的に広かったので大好きだったんだと思ったんです。ちょっと自分は、目の前のことにとらわれ過ぎていると、そんなことを感じてしまいました。」

それでは、現職教員が大学に対して求める授業内容とは何か。2003 年 1 月に当センターが主催したシンポジウム「これからの学校教育と教員養成カリキュラム―新教育課程のもとで教師をどうサポートするか―」のディスカッションから検討しよう（教員養成カリキュラム開発研究センターシンポジウム記録集）。まず、宇都宮大学大学院のカリキュラム開発専攻で、現職研修を担当している松本敏氏は、次のように語っている。

「今までは内地留学でも半年学校を離れてきます。それから、大学院は１年離れてきます。その離れる期間の中で、自己変革が行われる場合があったのです。例えば中学校の先生だったら、研修に来ている間は絶対に部活に行くなとか、ネクタイもしてくるなとか、そういうふうに言ってできるだけ学校から引き離して、違う世界にあえて入ってもらおうという努力をかなりしてきたのです。ですから、そのことの重要性はとても大切にしています。

それが、夜間を自ら担当することになりますと、６時まで先生の顔をしてきた人が、今度は慌てて駆けつけてくるところで仕事をすることになったわけです。そこでどうなるかなと思ったのですけれども、意外とこれはもちろん人にもよると思うのだけれども、その短い時間の中だけでも、昼間いろいろ持っていた不満とか疑問とか、そういうものを授業の中でほかの人と交流させつつ、私の話を聞きつつ、癒して帰るのです。そういう効果はやはりあると思っています。（中略）半年や１年、学校を離れて得る効果とどっちが大きいかと言われると何ともわからないのですけれども、そんなふうに思っております。」

また、同シンポジウムで、東京学芸大学の大学院の 2 年に在籍している現職教員は次のように発言している。

「昼間は松戸で中学校の教師をしておりますが、その私の実感から言いますと、現職でありながら（大学院に）来ていることの価値もとてもあると思っています。なかには、（大学が現職教員を）非日常の世界にいざなうことで新しい発見をされる方もあると思いますし、私がそのような場に置かれたらそのような発見もあったと思うのですが、日々やっているものをそのまま大学の中で検討できる。それをまた持って帰って実践できる。私は授業実践をその研究として２年間やりましたけれども、そういう意味では現職でありながら来ていることの価値というのも非常に大きいわけです。ですので、それぞれニーズに応じてといいますか、夜間は夜間の大学院として存在してほしいし、ちょっとお休みをいただいて、日中来るのもそちらも選択できるというような、そういう意味での多様性があってもいいのではないかと思っております。」

大学院の研修では、勤務校からいったん離れて学ぶ方法だけでなく、勤務校の日常をそのまま大学の中で検討し実践にすぐに生かしていくという方法がある。いずれにしても、大学教員側が、多忙な日常生活をやりくりして大学院に研修に来る現職教員のニーズを敏感に把握し、それに応えられるシステムとカリキュラムを十分に用意できるかが課題である。そこには、現在の小・中学校教員の実践や生活に対する理解と、日々の大学教員と現職教員との間の双方向のコミュニケーションが不可欠である。

参考文献　ベネッセ教育総研『第３回学習指導基本調査報告書速報版』2003 年。
教員養成カリキュラム開発研究センター『第 3 回シンポジウム記録集』2003 年。